名古屋大学教養教育院の新型コロナウィルスへの初動対応と中間アンケート

山　里　敬　也*
小　松　雅　宏**
古　泉　　隆***

＜要　旨＞

オンライン授業は、教員および学生に対する適切な支援と動機付けがあれば十分機能し、今後も実践されていくものと思われる。これは、名古屋大学教養教育院が実施した遠隔授業実施に関するアンケート（教養教育院中間アンケート）でも学生･教員の双方から 8 割もの指示を得たことからも明白である。とりわけ、動画の利用、学習時間に縛られない、通学しなくてよい、などオンラインならではの特徴を活かした教授･学習法との親和性が良い。また、説明･質問への回答が丁寧、迅速なフィードバック、コミュニケーションの機会が多い、グループワークなども学生の指示を集めていることから、アクティブラーニングの有効性がはっきり目に見える形をとってあらわれたように考える。授業時間中は演習･実習･ディスカッション（質疑応答も含む）などの時間にあて、必要な知識は授業時間外にオンラインで学ぶ。幸いなことに、このコロナ禍で十分な素地ができたと考えられるので、今後はアクティブラーニングの導入と支援を進めていくのが良い。そのためには、アクティブラーニングを支える ICT サポートに加えて、各授業における TA やメンターの充実を図ることが重要になる。

1. はじめに

本稿では、名古屋大学教養教育院での新型コロナウィルスへの初動対応

*名古屋大学教養教育院ハイブリッドラーニングセンター・教授
**名古屋大学教養教育院ハイブリッドラーニングセンター・准教授
***名古屋大学教養教育院ハイブリッドラーニングセンター・講師

について紹介していく。具体的には、2020 年 3 月から 5 月にかけて発信したオンライン授業への支援情報と緊急事態宣言が解除された直後から実施した遠隔授業実施に関するアンケート（教養教育院中間アンケート）について述べていく。

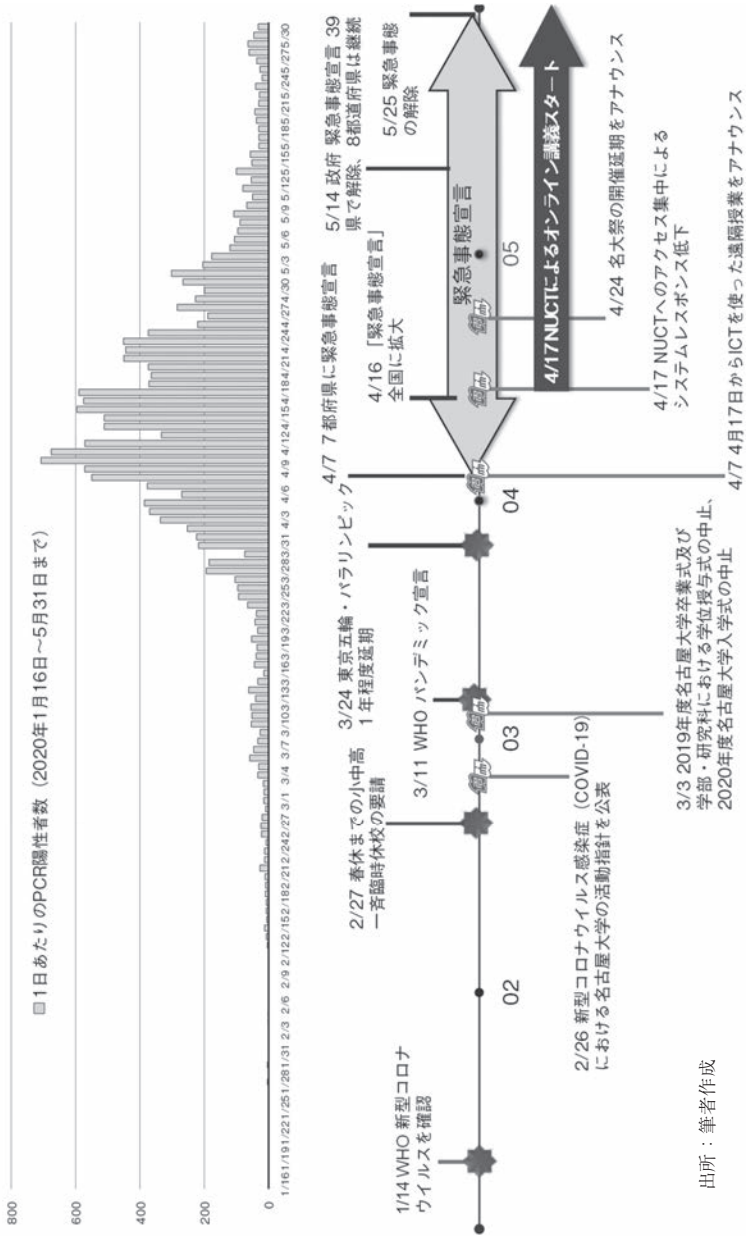
コロナ禍におけるオンライン授業については、既にいくつかの報告があり、総じて本稿で紹介する中間アンケートと同じ結論が導きだされている。たとえば、山内氏は九州大学と立教大学の調査に基づきオンライン授業への学生の反応について、孤立感を持っている学生への対応が課題であるが、オンライン授業は工夫次第で対面授業に匹敵する効果をあげることができる、と総括している（山内 2020）。また、文部科学省や大学生協が学生生活ついての調査結果を発表しているが、これらでもオンライン授業についての設問があり、全体的な満足度は高い一方で友人や教員とのコミュケーションに課題がある、とまとめている（文部科学省 2021、全国大学生活協同組合連合会 2021）。

オンライン授業に対しての肯定的な見解は、田口氏らが指摘するようにコロナ禍によりいわば「強制的」にオンライン授業を行う状況も一因と考えられるが、オンライン授業支援がうまく機能した結果とも言える（田口・鈴木 2021）。あるいは、本学の藤巻副総長が指摘するように、教員がいつもよりエネルギーを割いたせいであろう（藤巻 2020）。いずれにしても、オンライン授業は、教員および学生に対する適切な支援と動機付けがあれば十分機能し、今後も実践されていくものと思われる。

本稿では、名古屋大学教養教育院での新型コロナウィルスへの初動対応と中間アンケートについて述べていく。具体的には、次章で名古屋大学教養教育院の新型コロナウィルスへの初動対応として、オンライン授業の講習会とオンライン授業実践のための資料について紹介する。これらは講義開始となる 4 月 17 日までに慌ただしく行われたのだが、これでオンライン授業を十分に実施できるか不安が残った。そこで春学期の途中でアンケートを実施し、状況を把握することにした。第 3 章では教養教育院中間アンケートの内容と、また第 4 章では中間アンケートの集計結果（学生）から見えてきたことについて紹介する。最後に第 5 章でまとめる。

2. 名古屋大学教養教育院の新型コロナウィルスへの初動対応

2.1 名古屋大学の初動対応



出所：筆者作成

図1　1日あたりのPCR陽性者数（2020年1月16日～5月31日まで、データは厚生労働省オープンデータより）および新型コロナウイルスに対する名古屋大学の対応

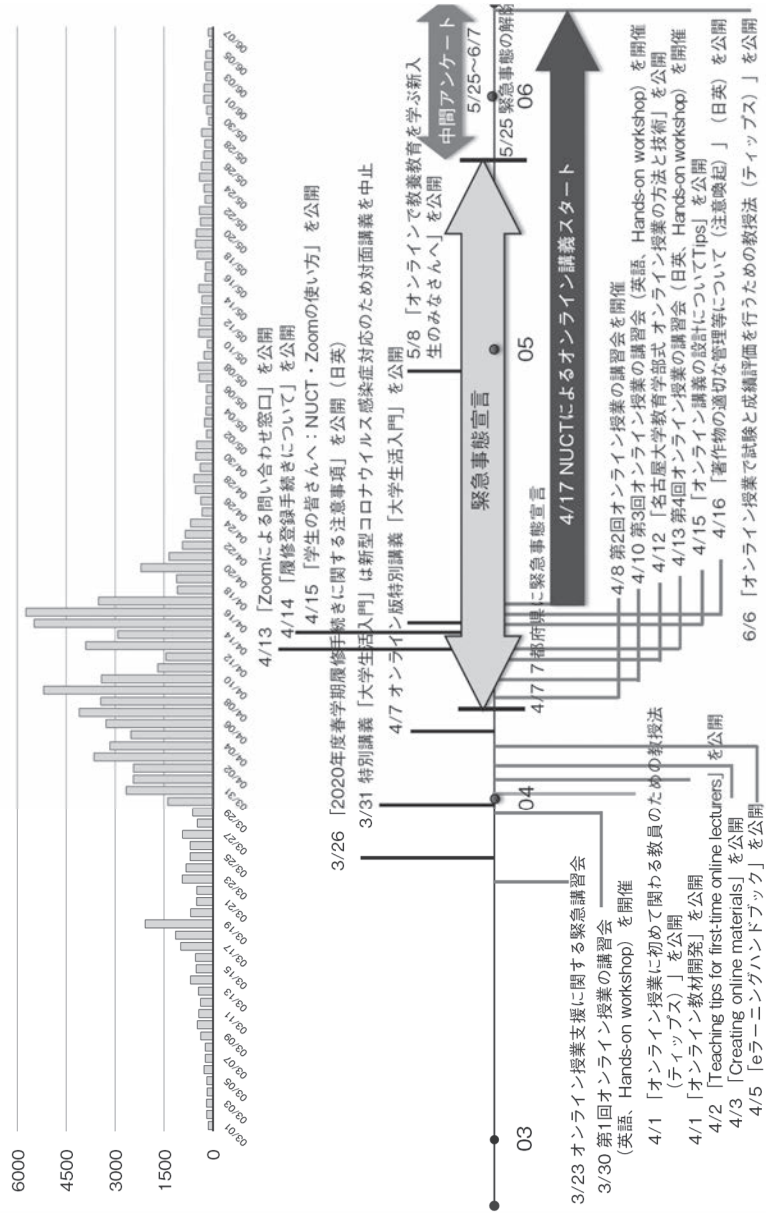
2020 年 2 月 25 日に新型コロナウイルス感染症対策の基本方針が発表された。その 2 日後には唐突に春休みまでの小学校、中学校、高等学校の一斉臨時休校が要請された。これに呼応するかのように、本学でも 2 月 26 日には活動指針を発表し、また、3 月 3 日には卒業式、学位授与式の中止、さらには 2020 年度入学式の中止を発表した。4 月 7 日に授業を 17 日からオンラインで実施するとのアナウンスがあった。万全の準備のもと迎えた初日は本学のオンライン授業支援システムである NUCT（Nagoya University Collaboration and Course Tool）がアクセス集中のためダウン。急遽、サーバを増強しての綱渡りの運用が始まった。これらの状況については図 1 にまとめてある。

さて、コロナ禍の入構制限のなか NUCT が授業を行うためのメインのツールとなったのだが、NUCT を一度も使ったことが無い教員が相当数いた。具体的には 4 割程度の教員しか使ったことが無く、また、本学の情報基盤センターが提供している各種 ICT ツール（たとえば全学メールと呼ばれるメールツール）を一度も利用したことが無い教員もいたばかりか、それらのツールを利用するための名大 ID をアクティベートしていない教員も少なからずいた。

教養教育院は、幅広い科目を扱うために非常勤講師も多く、外国人講師も多い。NUCT の利用法について英語での情報は無く、名大 ID やそれ以外のツールについても英語で十分な情報提供はなされていなかった。このように情報基盤センターが、これらの方々に対するケアができていなかったことが一因であるが、3 月 18 日に NUCT をアップデートしたばかりで、かつ、これまでの想定以上の本学の ICT 基盤の利用が見込まれる中、情報基盤センターがきめ細やかなユーザ対応を行うことは困難であることが容易に予想できた。

そこで、教養教育院ハイブリッドラーニングセンター（HLC）が中心となって「NUCT の使い方」の資料の英訳、また、オンライン授業の講習会を開催することになった。

2.2　教養教育院での初動対応



出典：筆者作成

図２　名古屋大学教養教育院ホームページのページビュー数（2020 年３月１日～６月７日まで）および名古屋大学教養教育からの学生向けの案内（中段）と教員向けの案内

2.2.1　オンライン授業の講習会

図 2 に教養教育院で初動対応をまとめる。4 月 17 日の講義開始に向け、3 月 23 日に情報基盤センターが「オンライン授業支援に関する緊急講習会」を開催した。この講習会は 500 名弱の聴衆を集めたため、本学の学習支援システムである NUCT の利用法や Zoom の利用法についての講習会は十分であるものと考えていた。ところが、非常勤講師の方や外国人講師の方からより分かりやすい、また英語での講習をやって欲しいとの声を受けて「オンライン授業の講習会」を教養教育院で企画した。「オンライン授業の講習会」は 3 月 30 日、4 月 8 日、10 日、13 日の計 4 回実施した。なお、説明だけでは不十分であると考え、ハンドオンワークショップと題し、対面とオンラインとのハイブリッド開催とした。会場で参加した下さった先生方に対しては、オンライン授業を実施するための様々な障壁をその場で全て解決することをめざした。たとえば、システムを利用するための名大 ID の有効化、全学メールの設定、NUCT へのログインや資料のアップロード、Zoom アカウント取得の支援など、多岐に渡る ICT 支援である。さらに、4 月 13 日には「Zoom による相談窓口」を開設し、質問者の PC 画面を見ながらの支援もできるようにした。

2.2.2　オンライン授業実践のための資料の公開

講習会の開催と並行して 4 月 1 日に「オンライン授業に初めて関わる教員のための教授法（ティップス）」と「オンライン教材開発」を公開、さらに 4 月 2, 3 日には両者の英語版を公開した（AC-IDT 2020）。これらの執筆は 2020 年度に発足した東海国立大学機構アカデミックセントラル･インストラクショナル･デザインチーム（AC-IDT）が担当した。メンバーは暫定的にコロナ禍での ICT サポートを担当する名古屋大学の部局 ICT 教員が兼ねた。4 月 16 日には「著作物の適切な管理等について（注意喚起）」（日英）を、また、6 月 6 日には「オンライン授業で試験と成績評価を行うための教授法（ティップス）」を公開している（AC-IDT 2020）。関連して 4 月 5 日には有志による「e ラーニングハンドブック」を公開している（AC-IDT 2020）。

3. 遠隔授業実施に関するアンケート（教養教育院中間アンケート）

4月17日の講義開始に向けオンライン授業の資料については4月第1週に、講習会も4月第2週までにはなんとか実施できた。ただし、これで先生方が問題無くオンライン授業を行うことができるとは思って無く、とれる対応をできる範囲でやった、との印象しかない。オンライン授業をうまく実践できず教員と学生の双方が途方にくれるのでは無いか、不安が募るばかりである。また、授業の状況を確認しようにもオンラインでの実施のため教室の外からから授業の様子を垣間見ることもできない。そこで春学期の途中でアンケートを実施し、状況を把握することにした。

アンケートは NUCT を用い、教養教育院の授業を受け持っている教員と学生全員に対して行うこととした。アンケート実施にあたっては情報基盤センターの大平先生に大変お世話になった。このような大規模なアンケートを実施するためには NUCT の機能をそのまま利用することはできず、カスタマイズが必要である。このカスタマイズを短期間で行ってくださった。

3.1　概要

遠隔授業実施に関するアンケートの目的はオンライン授業の実態調査である。具体的には

・グッドプラクティスと呼べる講義実施ノウハウをフィードバックすることで、後半の講義運営に役立ててもらう

・課題を抽出し、改善していく

の2つを設定した。また、アンケート対象者としては

・教養教育院·授業担当者

・教養教育院の講義を履修している学生

である。実施期間は

・2020年5月25日～6月7日

の2週間とし、実施方法は

・NUCT による小テストによる選択と自由記述欄

を用いた。最終的な回答率は

・学生：3302/4471 = 73.9%（20年度入学： 80.2% 、19年度以前入学：62.1% ）

・教員：412/664 = 62.1%

である。

アンケート項目については、教養教育院が実施している全学教育科目授業の教育学修調査（授業アンケート）を参考に設定した。表 1 に学生／教員向けアンケート項目をまとめる。上段が問いで下段が選択肢である。また、全てのアンケート項目には自由記述欄を設けた。これは、自由に意見を書いてもらうことで各アンケートの回答となる選択肢のみからは拾えない様々な意見を吸い上げることを試みるためである。

アンケートの分析手法としては、単純集計、相関分析、また自由記述欄の分析にはワードクラウド、テキストマイニングソフトである KH Coder による共起ネットワークを用いた（樋口 2020）。

アンケート結果については 6 月 1 日に速報値を、4 日には速報第 2 弾を NUCT を通じて公開した。最終結果については 6 月 15 日に開催された運営会議、翌 16 日に開催された教育分科会を経て全部局へ公開した。

表 1　教員／学生向けアンケート項目

	学生向けアンケート	教員向けアンケート
Q1 [授業の環境]	自宅でのインターネットを活用した遠隔授業による学習で支障のあることは何ですか。（複数回答可能）（各回答の具体的な内容を論拠欄に書いてください。その際、行頭に選択した記号を付してください。＜例＞A：自分専用の PC を持っていない。）	インターネットを活用した遠隔授業で困っていることはありますか。（複数回答可能）（各回答の具体的な内容を論拠欄に書いてください。その際、行頭に選択した記号を付してください。＜例＞A：自分専用の PC を持っていない。）
	A. PC、プリンタ等の機器面 B. ネット接続等の通信面 C. NUCT、ZOOM 等の操作 D. 一人で学習することによる孤独感や不安感 E. 教員とのコミュニケーション F. 学習内容が理解できない G. 授業内容に満足できない H. その他 I. 支障はない	A. PC、プリンタ等の機器面 B. ネット接続等の通信面 C. NUCT、ZOOM 等の操作 D. 学生とのコミュニケーション E. その他 F. 支障はない

Q2 [授業の方法]	受講する科目のうち、どれくらいの科目で、意見等を伝えたり質問・発表したりする機会が設けられていますか。（オススメのやり方があれば自由記載欄に書いてください）	担当する科目のうち、どれくらいの科目で、意見等を伝えたり質問・発表したりする機会を設けていますか。（オススメのやり方があれば自由記載欄に書いてください）
	○ ほとんどの科目 ○ 比較的多くの科目 ○ 半分程度の科目 ○ 比較的少数の科目 ○ ほとんどない	○ ほとんどの科目 ○ 比較的多くの科目 ○ 半分程度の科目 ○ 比較的少数の科目 ○ ほとんどない
Q3 [コミュニケーション]	授業の内外に関わらず、学生同士で相談したり、コミュニケーションを取る機会がありますか。（具体的にどのような方法でコミュニケーションをとっていますか？またどのような方法が良いと思いますか？自由記述欄に書いてください。）	担当する科目のうち、どれくらいの科目で、学生同士が相談したりコミュニケーションを取る機会を設けていますか。（オススメのやり方があれば自由記載欄に書いてください）
	○ ある　○ 一部ある ○ あまりない　○ ない	○ ある　○ 一部ある ○ あまりない　○ ない
Q4 [オンライン授業全般]	インターネットを活用した遠隔授業による学習のメリットを感じたことがありますか。（自由記載欄にその理由も書いてください）	インターネットを活用した遠隔授業によるメリットを感じたことがありますか。（自由記載欄にその理由も書いてください）
	○ ある　○ 一部ある ○ あまりない　○ ない	○ ある　○ 一部ある ○ あまりない　○ ない
Q5 [オンライン授業全般]	名古屋大学において、インターネットを活用した遠隔授業は、どのような方法がよいと思いますか。（複数回答可能）（その他を選択された方は、オススメの方法があれば論拠欄に書いてください）	どのようにインターネットを活用した遠隔授業を実施されていますか。（複数回答可能）（その他を選択された方は、具体的な実施方法を自由記述欄に書いてください）

	A. NUCT での資料配布・課題提出・小テスト・質問 B. A に加え、講義録画の視聴 C. A に加え、NUCT におけるフォーラム等での意見交換 D. A に加え、Zoom 等でのリアルタイム授業 E. A に加え、Zoom 等を使った質問・意見交換 F. その他	A. NUCT での資料配布・課題提出・小テスト・質問【日時を問わない、単方向型】 B. A に加え、講義録画の視聴【日時を問わない・単方向型】 C. A に加え、NUCT におけるフォーラム等での意見交換【日時を問わない、双方向型】 D. A に加え、Zoom 等でのリアルタイム授業【日時指定、授業の内容によって単方向・双方向型いずれもあり】 E. A に加え、Zoom 等を使った質問・意見交換【日時指定、双方向型】 F. その他
Q6 [オンライン授業全般]	総合的にみてインターネットを活用した遠隔授業でも学ぶことができそうですか。（自由記載欄にその理由も書いてください）	総合的にみてインターネットを活用した遠隔授業でも教えることができそうですか。（自由記載欄にその理由も書いてください）
	○ あてはまる ○ ややあてはまる ○ あまりあてはまらない ○ あてはまらない	○ あてはまる ○ ややあてはまる ○ あまりあてはまらない ○ あてはまらない
Q7 [グッドプラクティス]	これまでのインターネットを活用した遠隔授業で良いと思った授業があれば、科目・教員名・実施曜日・時限（または授業コード）とその理由を書いてください。（最大５件）	このほか、インターネットを活用した遠隔授業において教材や教授法など工夫していることをご記入ください。
	科目名 ____　教員名 ____　曜限又は授業コード ____　理由 ____	
Q8 [入構制限]	構内への入構制限により困っていることはありますか？(複数回答可能)　この他に入構制限により困っている事があれば論拠欄に書いてください。	

	○ 図書館（部局図書室）が利用できない。 ○ 学内施設（図書館以外）が利用できない。 ○ 学内でアルバイトができない。 ○ 生協の食堂が利用できない。 ○ 生協の購買が利用できない。 ○ 教員とのコミュニケーション ○ 友達とのコミュニケーション ○ サークル等、課外活動に関する情報が得られない。	
Q9 [要望など]	その他何でも思っていること・感じていることをお聞かせください。	

出所：筆者作成

3.2　集計·分析結果

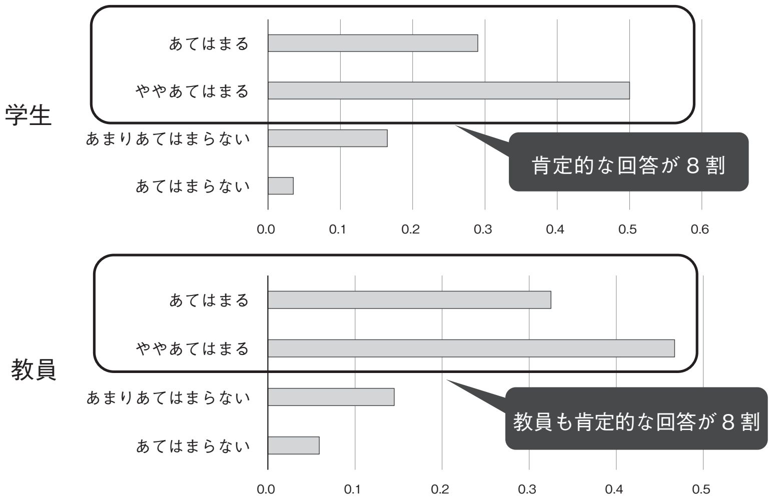
アンケート結果については、2021 年 6 月に開催された NII シンポジウムにて藤巻理事より発表いただいた（藤巻 2021）。藤巻理事の発表資料の最後にアンケートの抜粋も公開している。本稿では、

・インターネットを活用した遠隔授業による学習は有効か（Q6）
・インターネットを活用した遠隔授業による学習のメリット（Q4）
・自宅でのインターネットを活用した遠隔授業による学習で支障のあること（Q1）

について、好意的な意見と否定的な意見に分けて述べていく。

3.2.1　インターネットを活用した遠隔授業による学習は有効か（Q6）

まず、インターネットを活用した遠隔授業が有効か否かについて見ていこう。図 3 に Q6 の単純集計結果を示す。肯定的な意見である「あてはまる」「ややあてはまる」が学生と教員の両者ともに 8 割を占めている。アンケートの開始直前まで緊急事態宣言が発令されて入構制限がかかっていたため対面授業を行うことができず、他に代替手段がなかったことも影響しているとはいえ、インターネットを活用した遠隔授業について学生と教員の両者ともに総じて好意的な見解を確認できた。



出所：筆者作成

図３　「Q6：総合的にみてオンラインでも学ぶことができそうですか。」の単純集計結果

出所：筆者作成

図４　「Q6：総合的にみてオンラインでも学ぶことができそうですか。」の自由記述欄のワードクラウド

図 4 に学生の自由記述欄のワードクラウドを示す。ワードクラウドでは、自由記述欄に記載されている単語（ワード）のうち、出現頻度の高い単語をより大きく表示する。授業、理解、問題、学習、質問など授業に関連するワードが大きく表示されていることからもインターネットを活用した遠隔授業が有効であることを垣間見ることができる。

3.2.2　インターネットを活用した遠隔授業による学習のメリット（Q4）

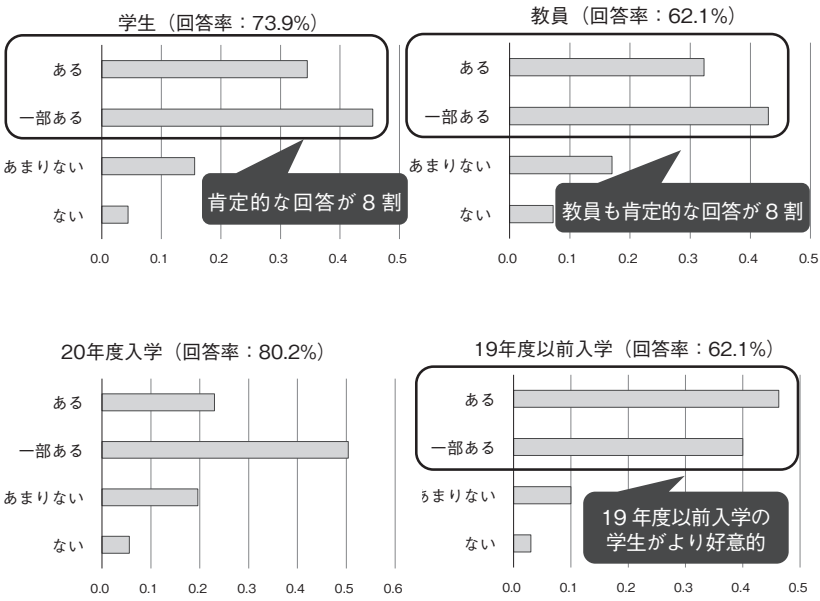
インターネットを活用した遠隔授業による学習のメリットについてどのように感じているのか見てみよう。図 5 に Q4 の単純集計結果を示す。上段に示すように学生、教員の大多数が学習あるいは教授上のメリットがあると答えている。一方、図 5 の下段に示すように、2020 年度入学者と 2019 年以前入学者とでは、遠隔授業による学習のメリットの感じ方が異なっている。2019 年以前入学者がより肯定的である。2020 年度入学者は、アンケート開始時点では対面授業を受けていない。結果として、友達を作る機会を失い、互いにコミュニケーションを取ることが難しくなっていることが伺える。一方で、2019 年以前入学者は同期の友達もいてコミュニケーションを取ることに支障が少ないことが伺える。

図 6 に Q4 の自由記述欄の共起ネットワークを示す。共起ネットワークでは、ワードクラウドと同様に単語（ワード）の出現頻度に応じて単語の周りの円を大きく表示する。さらに、これらの単語が互いに同じ文章に現れる頻度を調べ（共起関係）、その関係が強い（距離が近い）もの同士を結ぶ。こうすることで、より多くの文章で同時に出現する単語同士が結ばれることになり、自由記述欄に記載された文章の総意、つまり全体としてどのような意見としてみることができるのかを出現頻度の高い単語同士の繋がりとして浮かび上がらせることが可能となる。

図 6 にはインターネットを活用した遠隔授業による学習のメリットが「ある·一部ある」と回答した学生の共起ネットワークを示している。ここから分かることは、学生はメリットとして、

・学習時間に縛られない
・動画利用の効果
・通学しなくてよい

と考えていることが示唆できる。



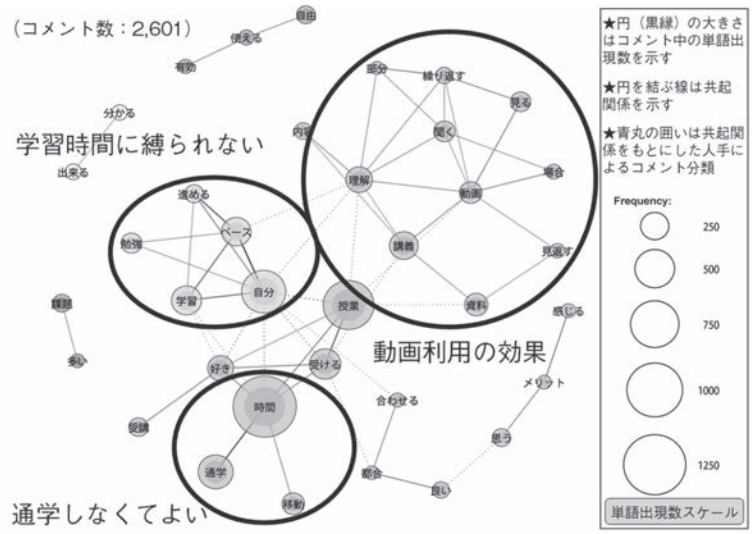
出所：筆者作成

図５　「Q4：オンライン学習のメリットを感じたことがありますか。」の単純集計結果

一方、図７には否定的な意見である「ない・あまりない」と回答した学生の共起ネットワークを示している。ここからは、

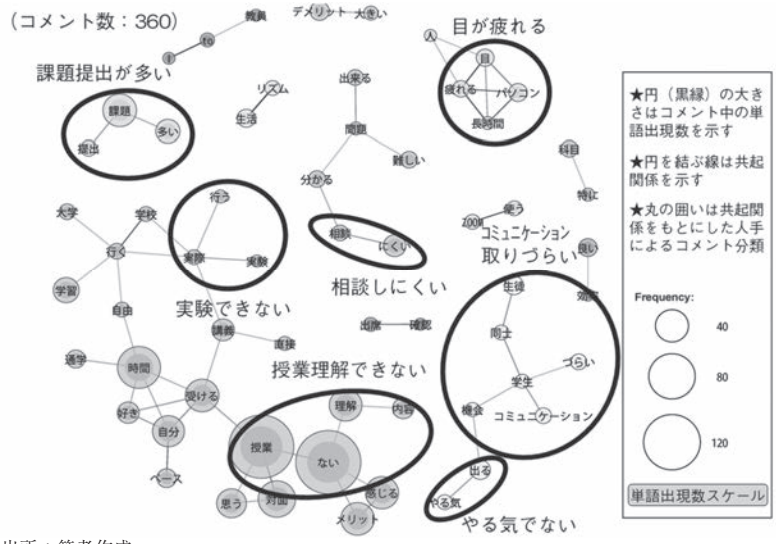
・目が疲れる
・課題が多い
・実験できない
・相談しにくい
・コミュニケーションが取りづらい
・やる気がでない

などが理由として浮かび上がっている。



出所：筆者作成

図６　「Q4：オンライン学習のメリットを感じたことがありますか。」で「ある・一部ある」と回答した学生の理由記述欄の共起ネットワーク

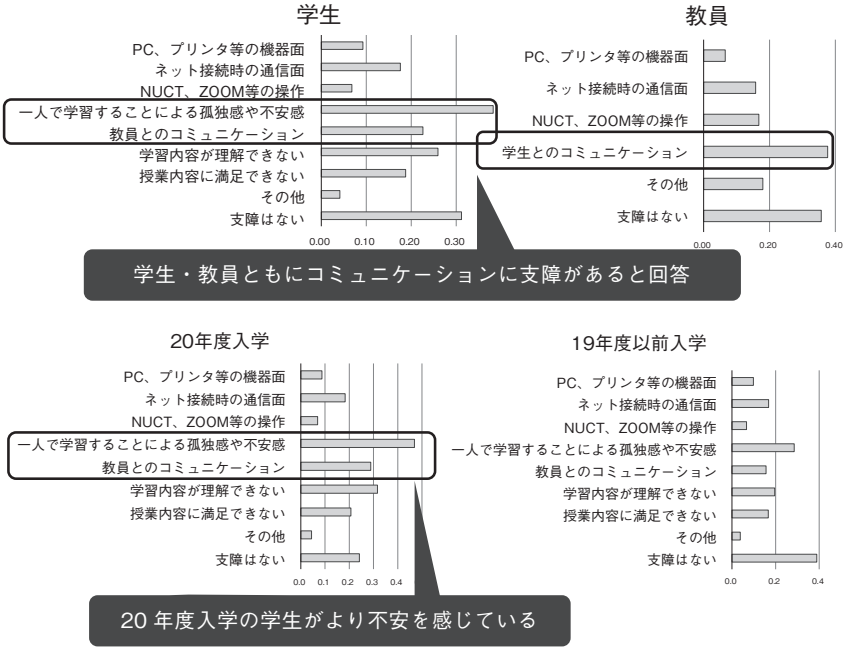


出所：筆者作成

図７　「Q4：オンライン学習のメリットを感じたことがありますか。」で「ない・あまりない」と回答した学生の理由記述欄の共起ネットワーク

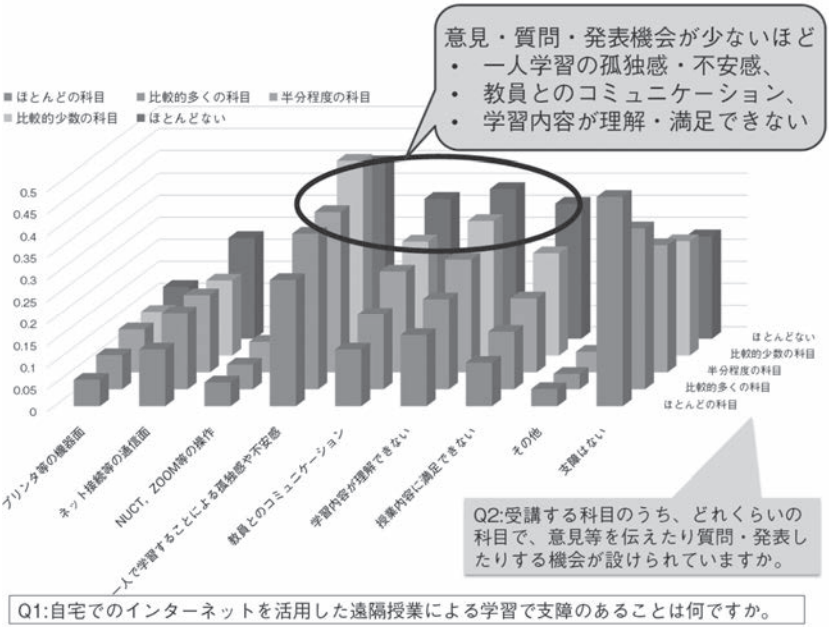
3.2.3　自宅でのインターネットを活用した遠隔授業による学習で支障のあること（Q1）

では、遠隔授業による学習で支障のあることは何か。図 8 に Q1 の単純集計結果を示す。上段に示す学生と教員の集計結果より学生·教員ともにコミュニケーションに支障がある、と答えている割合が高い。一方で、支障は無いとの答えも同程度いる。図の下段に 2020 年度入学者と 2019 年移行入学者の集計結果を示しているが、図 5（Q4）の集計結果でも垣間見ることができたように、2020 年度入学の学生がより不安を感じていることが見て取れる。



出所：筆者作成

図 8　「Q1：自宅でのオンライン学習で困っていることは何ですか。（複数回答可能）」の単純集計結果



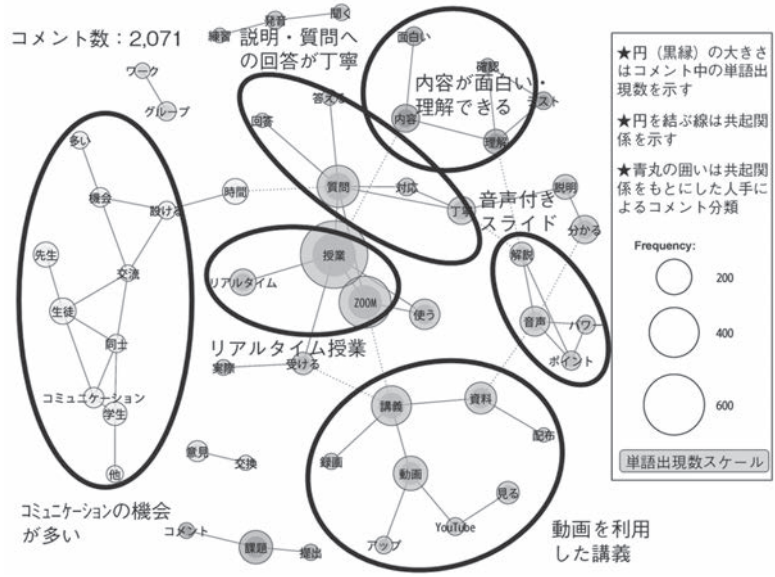
出所：筆者作成

図９　Q2 と Q1 の相関分析（否定的）

図 9 に Q2 と Q1 の相関分析を示す。相関分析は互いのデータの関係性（相関係数）を計算し数値化する分析手法で、相関係数が 1 に近づくほど関係が強くなる。図 9 では X 軸に Q1、Y 軸に Q2、Z 軸に相関係数を示している。図中に楕円で示しているように Q2 の設問である意見･質問･発表機会が少ない（ほとんど無い、比較的少数の科目）の回答ほど、Q1 の回答のうち否定的な見解となる、

・一人で学習することによる孤独感や不安感
・教員とコミュニケーションが取れない
・学習内容が理解できない
・授業内容に満足できない

との相関係数が高くなっている。



出所：筆者作成

図 10　Q7　グッドプラクティスの共起ネットワーク

3.3　グッドプラクティス

最後に Q7 の結果について紹介する。Q7 ではグッドプラクティス（これまでのオンライン授業で良いと思った授業）について自由記述欄に書いてもらった。図 10 にグッドプラクティスの共起ネットワークの共起ネットワークを示す。

グッドプラクティスとしてあがった授業実践の特徴として共起ネットワークから推察できることとしては、

・内容が面白い·理解できる

・説明·質問への回答が丁寧

・コミュニケーションの機会が多い

など、図 9 の結果からも読み取れることが浮かび上がった。また、これらの授業の特徴としては

・リアルタイム授業

・動画を利用した授業

・音声付きスライド

が上がっている。

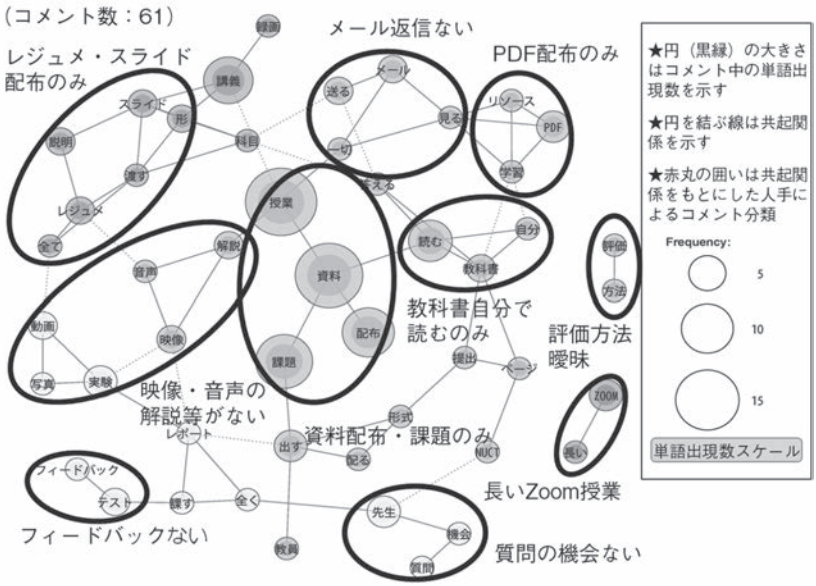
以上の特徴については、Q7 で学生があげた授業とその理由からも垣間見ることができる。表２に代表的な学生の声をまとめる。

表２　科目区分別グッドプラクティス講義

科目区分名称	理由抜粋
基礎セミナー	・zoom による授業でのグループディスカッション、講義が楽しい ・メールを用いた先生との交流の機会があるから。
基礎セミナー	・積極的に ZOOM のブレイクセッションルームを使用して話し合いをしているため。
基礎セミナー	・資料による学習と意見交換を兼ねているから。 ・Zoom を用いてのオンライン講義で、Zoom では主に配布資料を読んだ感想や意見の交換が行われるが、なかなか同級生と話す機会がない中での意見交換は楽しく助かっている。
言語文化Ⅰ	・先生独自の Web サイトで問題演習を行い、意見交換も可能。 ・参考となる動画を多く紹介して頂けるため.
言語文化Ⅰ	・Zoom ブレークアウトセッション等で学生同士のコミュニケーションが可能。 ・NUCT の機能を活用し学生同士で英文の添削等を行えるようにしていたため。 ・課題へのフィードバックが丁寧。
言語文化Ⅰ	・こちらも zoom による授業で理解力が高まるのと、グループワークで自分が発言しやすい環境にあるかつ他の人の生身の意見も聞けるのがとても良いです。授業内容もとてもためになります。
言語文化Ⅰ	・Zoom でグループセッションを作り、学生同士のコミュニケーションが多い。
言語文化Ⅰ	・ZOOM のブレークアウトセッションを利用したグループワークなど、インターネットを有効に活用していると思うから。 ・zoom によるリアルタイム授業で、学生にも発言の機会がある
言語文化Ⅰ	・Zoom を活用して１人ひとりに発音のアドバイスがある。 ・Zoom で口の形が見やすい。
言語文化Ⅰ	・Zoom を通じて発言・会話の機会が多い。 ・音声付きの資料があり、自習に役立つ。
健康・スポーツ科学	・事前に掲載した資料をリアルタイムで解説してくれる。 ・質問時間をきちんと確保している。
文系基礎科目	・毎回質問とコメントを課題として募り、次回の授業で質問に答える動画を作ってくれる。 ・授業後に Zoom による質問会を実施してくれる。

文系基礎科目	・Zoom のリアルタイム授業。 ・オンラインでも学生を指名して意見を求めており、緊張感がある。
文系基礎科目	・説明が丁寧。 ・Zoom のリアルタイム授業だが、授業内で多くの人に発言させている。 ・授業後の感想が次の授業までに公開されるので，他の学生の考えが聞けて面白い。
文系基礎科目	・提出した課題（レポート形式）に対して毎回コメントがある。 ・メッセージでの質問の対応が早い。
理系基礎科目（文系）	・Youtube ライブによるリアルタイム授業 ・大人数のクラスでも先生、学生間のコミュニケーションがとりやすい。
理系基礎科目（文系）	・授業後のアンケートなどで学生の授業への反応や不安なことなどを聞き、その内容を講義に反映してくれるから。 ・学部別で交流する機会などを設けてくれているため（Zoom 等を用いて）。
理系基礎科目（文系）	・分かりやすい動画を NUCT にアップしてくださるから。 ・NUCT のメッセージ欄での教授の質問対応が丁寧

出所：筆者作成



出所：筆者作成

図 11　Q7　バッドプラクティスの共起ネットワーク

3.4　バッドプラクティス

図 11 にバッドプラクティスの共起ネットワークを示す。バッドプラクティスについては教養教育院事務室の協力のもと「Q9:その他何でも思っていること·感じていることをお聞かせください。」から該当するものを抜き出して分析を行った。図 11 より授業に対する学生の否定的な意見としては、

・レジュメ·スライドの配布のみ
・PDF 配布のみ
・教科書を自分で読むのみ
・資料配布·課題のみ
・映像·音声の解説が無い

などの授業をおざなりなやり方で行っていることに対する不満に加えて、

・メールの返信が無い
・フィードバックが無い
・質問の機会が無い

など適切なコミュニケーションを取っていない、あるいは取る機会を与えていないことに対する不満、

・長い Zoom 授業
・評価方法が曖昧

などもあがっている。

4. 教養教育院中間アンケートの集計結果（学生）から見えてきたこと

まず指摘しておきたいことは、オンライン授業そのものについては、学生·教員の 8 割が肯定的に捉えているという点である。とりわけ、表 2 に示した学生の声からは、

・動画を利用した講義
・音声付きスライド

の有効性と共に、

・学習時間に縛られない
・通学しなくても良い

が指摘されている。これらは、授業時間外学習としてのオンライン授業を指示するものと考えられる。また、

・説明·質問への回答が丁寧
・迅速なフィードバック

・コミュニケーションの機会が多い
・グループワーク
などを評価していることから、授業時間中における（自ずとコミュニケーションが活発になる）演習·実習·ディスカッション（質疑応答も含む）などアクティブな活動を指示するものとも考えられ、アクティブラーニングの有効性が顕在化しているように思う。加えて、
・内容が面白い
・理解できる
こともあげており、そもそも授業としての魅力が無いと学習意欲が湧かないことも示唆される。

一方、バッドプラクティスとして学生が指摘した事項については、オンライン授業だからと言うわけでも無く、そもそも授業運営がまずいことが示唆される。たとえば、学生からは次のような否定的な意見が寄せられている。

・ほとんど説明がなく図ばかりのせられているレジュメだけ配布してそれでテストを行われても、わからないことばかりで学習のしようがないです。レジュメ配布のみは厳しいと思うので講義動画やオンライン講義が必要不可欠と思われます。

・音声なし 80p 越えのレジュメはやめてほしい。

・講義スライドだけを渡すような形の専門系の科目はおそらく教授側からすれば各自勉強してほしい（そもそもその勉強をするために大学に来たのだから）と考えるようだが、学生の考えでは、正直なところ右も左も分からないのでどこから勉強すればいいか分からないと思ってしまう。質問する場合も非常に薄っぺらい内容のものになってしまい、学生と教授双方に不利益と感じる。

・講義や教員にも寄ると思うが教科書のここを読んで章末問題を答えるだけのような雑なものになっているものもあり満足できていない。

・遠隔授業により、各講義とも課題のウェイトが大きくなっており、課題をこなすのが非常に大変です。特に知識がないまま、何かを論評するようなレポートが課されたときは、何を書いていいのか全く分からず非常に戸惑います。

・先生の雑談を聞く機会がないことは残念に思います。

・各授業が、毎回それぞれの方法で、それぞれ課題を出すので、この授業はどんな形態で、いつまでになんの課題を出さなければならないか、分からなくなってしまうことが多い。

5. まとめと今後の展開

本稿では、名古屋大学教養教育院での新型コロナウィルスへの初動対応と緊急事態宣言が解除された直後から実施した遠隔授業実施に関するアンケート（教養教育院中間アンケート）について述べた。オンライン授業は、教員および学生に対する適切な支援と動機付けがあれば十分機能し、今後も実践されていくものと思われる。これは両者から8割もの指示を得たことからも明白であり、動画の利用、学習時間に縛られない、通学しなくてよい、などオンラインならではの特徴を活かした教授·学習法の有効性が確認できた点において前向きに評価しても良いものと考えている。また、説明·質問への回答が丁寧、迅速なフィードバック、コミュニケーションの機会が多い、グループワークなども学生の指示を集めていることから、アクティブラーニングの有効性がはっきり目に見える形をとってあらわれたように考える。授業時間中は演習·実習·ディスカッション（質疑応答も含む）などの時間にあて、必要な知識はオンラインで学ぶ教授·学習法である。コロナ禍で十分な素地ができたと考えられるので、今後はアクティブラーニングの導入と支援を進めていくのが良い。

一方で、教員と学生、また、学生間のコミュニケーションが鍵を握ることも分かった。とりわけ、バッドプラクティスとして学生が指摘した、たとえば、資料の配付のみ、（映像·音声による）説明無し、メール返信·フィードバックが無い、など学生とのコミュニケーションが不足、などに加えて、評価方法が分からない、質問の機会なし、長いZoom授業など、そもそも授業運営がまずいことが示唆される。学生の辛辣なコメントも散見されることから、これらの授業については改善が必要である。

ところで、授業時間中に一人ひとりの学生とコミュニケーションを取ろうとした場合、当たり前だが相応の時間がかかる。90人のクラスで一人1分かけると90分かかる。従って、授業規模としては少人数、あるいは、TAやメンターなどを十分に配置し、一人ひとりの学生をサポートできる体制が必要になる。

今後の展開としては、アクティブラーニングを支えるICTサポートに加えて、各授業におけるTAやメンターの充実があげられる。そして、各教員がおのおの担当する授業の魅力をあげてもらうことが最も良い授業改善方法であることに疑いの余地はない。

参考文献

藤巻朗、2020、「ICTを利用した教育を振り返る」大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム「教育機関DXシンポ」講演資料。(https://edx.nii.ac.jp/lecture/20200626-04, 2021.12.20)

樋口耕一、2020、「社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－（第2版）」ナカニシヤ出版。

文部科学省、2020、「全国一斉臨時休業関係（2/28～春季休業前まで）」。(https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00006.html, 2021.11.26)

文部科学省、2021、「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」。(https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf, 2021.11.26)

田口真奈・鈴木健雄、2021、「オンライン授業・ハイブリッド型授業の質保証に向けて－京都大学の授業支援を事例に－」『名古屋高等教育研究』21: 49-75。

東海国立大学機構アカデミックセントラル・インストラクショナルデザインチーム（AC-IDT）、2021、「オンライン授業に初めて関わる教員のための教授法（ティップス）」。(https://office.ilas.nagoya-u.ac.jp/オンライン授業に初めて関わる教員のための教授/, 2021.12.20)

東海国立大学機構アカデミックセントラル・インストラクショナルデザインチーム（AC-IDT）、2021、「オンライン教材開発」。(https://office.ilas.nagoya-u.ac.jp/オンライン教材開発/, 2021.12.20)

東海国立大学機構アカデミックセントラル・インストラクショナルデザインチーム（AC-IDT）、2021、「著作物の適切な管理等について（注意喚起）」。(https://office.ilas.nagoya-u.ac.jp/proper-handling-of-copyrighted-materials/, 2021.12.20)

東海国立大学機構アカデミックセントラル・インストラクショナルデザインチーム（AC-IDT）、2021、「eラーニングハンドブック」。(https://office.ilas.nagoya-u.ac.jp/eラーニングハンドブックを公開します/, 2021.12.20)

山内祐平、2021、「コロナ禍下における大学教育のオンライン化と質保証」『名古屋高等教育研究』21: 5-25。

全国大学生活協同組合連合会、2021、「緊急！ 大学生·院生向けアンケート」『大学生集計結果速報』。(https://www.univcoop.or.jp/covid19/enquete/pdf/link_pdf02.pdf, 2021.11.26)